

令和元年度 前期卒業式式辞



学部を卒業し学士の学位を得た8名の皆さん、博士前期課程を修了し、修士の学位を得た1名、そして博士後期課程を修了し、博士の学位を得た3名の皆さん、おめでとうございます。本日、皆さんを本学から卒業生、修了生として送り出せることを、列席しております理事、副学長、学部長、事務局長および教職員とともに心より、お祝い申し上げます。また、本日の卒業式にご出席賜りましたご家族、ご関係者の皆様にも衷心よりお慶び申し上げます。

皆さんは、人生における区切りとして、これまでに幾つかの卒業式を経験してこられたはずですが、大学・大学院の卒業式は、これまでのものとは異なる意味を持ちます。端的には、教育課程から社会へ出発する門出であり、船に例えるならば「解纜」、つまり纜（ともづな）を解いての船出になります。以前は、「社会の荒波に揉まれる」という言葉を使い、社会の厳しさを経験して、大きくなりなさいとする門出の言葉がよく用いられていました。

皆さんご承知の通り、社会は大きく変化しており、その変化のスピードは非常に速く、まさに、荒波となって皆さんを待ち受けています。今日までの常識が明日には通用しなくなる不確かであり、かつ激しく変化する社会の中では、自らの指針に基づいて行動する力が必要になります。少し前には、このような力を自律力と呼び、その力を持つことが重要であることが喧伝されました。和歌山大学において、教育課程を卒業・修了した皆さんは、既にこの力を身につけています。自信を持って、社会の荒波に船出をしていただきたいと思います。

日経HRが発行している『価値ある大学2020年版 就職ランキング』において、学生イメージの評価では、熱意・主体性・チャレンジ精神を併せた「行動力がある」という評価において、本学が全国11位となりました。これは、本日ここにいる皆さんを含めた本学卒業生の皆さんが備えている能力と自負して良いと考えます。

その一例を挙げますと、本日みなさんとともに卒業される教育学部の藤田恵奈（けいな）さんは、JICA ボランティアとして2年間、西アフリカのベナンで活動されました。大学を

休学して実施した JICA ボランティアでは、小学校教育を担当してベナン各地を巡回され、現地の教育に貢献するとともに、孤児院での活動など青年の活動支援にも着手され、JICA ボランティアとしての任を見事に果たされました。日本と異なり、ベナンの環境は必ずしも整えられてはいませんが、そこでの2年間の活躍がベナンと日本との関係を深めることに寄与したことは明らかです。

藤田さんの活動は誇るべき素晴らしいものですが、藤田さんの活動に代表される行動力とバイタリティーは決して彼女だけのものではなく、先に述べた「行動力がある」という評価のように、皆さんも本学における教育課程で身につけ、十分な力を備えているのです。それを自覚し、自信を持っていただきたい。臆することなく、社会で自らの活躍の場を求めて「解纜」し、社会に船出してください。

激しく変化を続ける社会にあって、自らの指針を持ち困難に立ち向かっていく時、行動力とバイタリティーに加えて、パッション（情熱）という燃料が必要になります。優れたエンジンを持ち優れた船長に指揮されている船であっても、燃料がなければただ波にのまれるばかりであり、自律的な航行は望めません。情熱は自らの興味、好奇心により生じる内面的な力であり、自らが養うことのできる力です。本学での学びを通して皆さんが身につけてきた社会を見通す力を発揮し、移ろいゆく社会の姿を俯瞰し、社会のあるべき姿を見据えて、自らの意志を固めてください。その過程で、皆さんにパッションが生まれ、社会の中で活躍する力が生まれてくると信じています。

これからの社会生活の中で、皆さんが和歌山大学で培った行動力とバイタリティーを補強するとともに、パッションを持ち、この激しい社会の中、新しい地平を目指して進まれることを祈念しています。

最後に、和歌山大学が、新制大学として創立されてから70年となる記念すべき年に卒業される皆さんに、和歌山大学70周年記念に選んだ言葉を解纜の饞として贈ります。

「そして ここから」



令和元年九月二十四日

和歌山大学 第十七代学長 伊東 千尋